
恋の温度

つきよのこねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の温度

【著者名】

Z6745L

【あらすじ】 つかみのいねこ

堅物な生徒会副会長の彼氏との甘いバレンタインデーを……。

生徒会室の扉を開けると、いつもそこに彼はいた。
いつも難しい顔で、一人で生徒会室で仕事をしている、副会長。
会長が人気だけで選ばれた皺寄せを、一手に引き受けちゃってる
苦労症な人。

「やっぱり、いた」

扉を開くと、今日も彼は生徒会室にいた。

「いたら、悪いか？」

資料をコピーしていた御影先輩が振り向いて言った。

一つ学年が上の御影先輩は、我が校の生徒会副会長。
生真面目だと評判の優等生の彼は、人気だけで選ばれた名ばかり
の会長の代わりに生徒会を支え、運営管理をしている。

生徒会書記の友達が、人手が足りないからと手伝わされているう
ちに、何となく気になり出して、去年のバレンタインデーにわたし
から告白した。

たぶん、ふられる。

そう思つてたのに、予想外にOKを貰つてしまい、一年。

彼女が出来ても、相変わらず、彼の放課後のスケジュールは生徒
会室でお仕事。

結果、放課後は一人で生徒会室で過ごすのが定番になってしま
た。

「今日も難しい顔してるね。また何かあつた？」

「会長が、生徒会室の鍵を落としたそつだ。ドブ川に」

「めかみを押さえながら、御影先輩が感情のこもらない声で言ひ。

「そ、そつなんだ…」

「幸い、予備を俺が持つていたから問題はないが……」

キュツと引き結ぶ唇に静かな怒りを感じて、わたしは返事に困り、頬をかいた。

会長が生徒会室の鍵を落としたのって、これで二回…三回田だつけ？

寄り付かない生徒会室の鍵なんか、会長には邪魔なだけなんだろうな。

「冗子。どうせ暇だらう…手伝え」

暇…だけどさ。暇なのは、彼氏の誰かさんが構ってくれないからなんんですけど。

「はいはい」

ここに来たからには手伝うつもりで来たからいいけどや。

今日が何の日かなんて、興味ないんだろうな。

朝も昼休みも渡せなかつたから、放課後まで来ちゃつたけど、人氣者の彼はすでにたくさんもらつてるだろうし、わたしの分がなくとも気にしなさそう…。

御影先輩がまとめた資料をホチキスでとめながら、わたしはそつと溜め息をつく。

彼らしこと言ひれば彼らしいので、怒る気にはなれないけど

……やつぱり寂しい。

昨日、有名店の限定チョコレートを苦労して手に入れた甲斐が…。パチ……パチ……とホチキスをとめる音が静かな生徒会室に響く。やつと資料を揃えた頃には、もう西口がオレンジ色に染まっていた。

「よし。こんなもんだらう」

丁寧に重ねた資料を長机の上に置いて、御影先輩が言つた。

「うふ。じゃあ、帰るつか

鞄を置いてある椅子に手をかけよつとした時。

「廻子」

御影先輩が呼んだ。田を上げて彼を見る。背中にタロを背負う御影先輩の表情は、いつもと違つて、少し躊躇つているような、憂いのある表情だつた。

「何か…忘れてないか？」

「え? やり忘れたことはなー」と思ひカビ…なんか、ミスした?

「いや、生徒会の仕事のこじりじゃなくて…」

「…………?」

不思議そうな顔のわたしに、御影先輩はじれつたそつに机を指で叩ぐ。

「今日は……バレンタインデーだわ」

「えつー！」

御影先輩の頬がうつすらとピンク色に染まっているのを見て、わたしは驚いて彼を見つめた。

全然、興味ないんだと思つてたから、びっくり。

「あ、うん…」

まさか催促されるとは……。

意外なことに戸惑いながら、朝からスクールバッグの中にあった赤い箱を取り出して、御影先輩に差し出した。

「…ありがと」

伏せ目がちに、安堵したように吐息まじりに低く呟く御影先輩にドキッとする。

「……もしかして、待つてた？」

そう、尋ねると、御影先輩は呆れたようにわたしを見て、溜め息をついた。

「朝も休み時間も昼休みも一向に現れないし、ここに来てからも一向にくれる気配がないから、忘れてるのかと思つたぞ」

責めるように見られて、わたしは頬を染める。

「たくさんチヨン貰つたから、もうこりないかと思つて……」

「次元が違つだろ。他の女子からと廻子からでは」

「そう、なんだ……？ 次元が違つんだ……。けよつといつてこつか……かなり嬉しい……。」

「廻子」

御影先輩がわたしの腕を引き寄せ、次の瞬間、噛みついて口を開かれて、歯を重ねながら、抱き寄せられる。

「あんまつ、ヤキモキさせるな」

「……チヨン」、御影先輩が好きそつなやつ、頑張つて並んで買つたんだよ？」

「……そうか」

柔らかくなる御影先輩の眼差しに、わたしの心はとろけた。

「だから、ちせんと食べてね~」

わたしの気持ち」と。

もう一度、キスをねだるように口を開じると、すぐに御影先輩のキスが降つてくる。

大好き。

つて、気持ちが伝わるよつに、わたしたちは甘いキスをする。

御影先輩は真ん中がトロッとしたチョコみたい。

少しほろ苦くて、甘い……体温で溶けるチョコみたいな人。一年前より、ずっとずっと、想いをこめて。

「御影先輩、好きです」

愛の告白をする。

だつて、今日は、年に一度のバレンタインデー。女の子から告白する日だから。

きっと、今年も、ホワイトデーにはお返しが貰えるだろ？

来月は、御影先輩から告白してよね？

悪戯っぽく笑いながら言つわたしに、

「バカ」

と、照れたように咳いて、御影先輩はおしゃべりなわたしの口を再び塞いだ。

* おしまい *

(後書き)

あとがきです。

短いお話ですが、バレンタイン創作をしてみました。
実はこの作品は、自サイトでは名前変換機能を使つた、夢小説でした。

私にとっては、オリジナルでの初めての夢小説。
ドキドキでアップしたのを、今でも覚えています。

御影先輩の生徒会副会長つて設定は、私の好み。会長より副会長キャラが好きです。参謀つて感じの、頭がいい人が好きなんですね。
私の副会長キャライメージは堅い、眼鏡、裏がありそう(笑)。
黒い人は好きではないので、裏は実は素晴らしい優しいとかがいいです。

こんな、私の好みやイメージ詰め込んだ副会長設定ですが、お楽しみいただけたら…嬉しく思います。m(—)m

書いた後に気付いたのですが、三年生なら一月には生徒会はとつ
くに後輩に委ねてるはずですよね；
つじつま合わないけど、そこは気にしない方向でお願いします…(

<—>

実はこの作品の「禁バージョン『恋の温度+』も書いています。
18歳以上で興味がある方は、そちらもぜひ。

内容はHがあるかないかの違いだけで、殆ど一緒です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6745/>

恋の温度

2010年10月9日19時18分発行